



山陽スピリット ニュース No.9

2017(平成29)年10月27日

発行：学校法人 山陽学園 広報・山陽スピリット推進室

平井キャンパスで 佐藤忠良作品を味わう

山陽学園短期大学 幼児教育学科
准教授 鳥越 亜矢

平井キャンパス内にブロンズ製の女性像があるのをご存知ですか？そのブロンズ像は日本を代表する具象彫刻作家、佐藤忠良の「気どったポーズ」という作品です。

山陽学園大学や山陽学園短期大学に通っている人なら、自転車置き場の近くにある「あれのことかな？」と思うかもしれませんね。「え？そんなのあったかな？」と、存在すら気に留めていない人もいるのでは？

実は、7月に幼児教育学科2年生が「図画」の授業でその像を鑑賞しました。像がある事くらいは知っていたけれど、ちゃんと見るのは初めての学生たちです。屋外作品の鑑賞はこれが初めての試みです。教室を出て、グラウンドに面したD棟の前を通り、だんだんと作品に近付いていきました。美術館では作品を鑑賞できる範囲に制限があったりしますが、野外彫刻作品鑑賞の良いところは、360度どこからでも作品を見ることができる点です。横に回り込んで見ていた学生からは、こんな言葉が聞こえてきました。「ショートカットの女の人だと思っていたら、髪をくくっていたんだ。」「髪長かったんだ。この人。」像の後ろに回ると、「短大創立20周年記念 大本榮一 大本愛子」とあり、「この像を寄贈してくれた人？」とつぶやく学生も。正面に回ってよく見ると、台座に「気どったポーズ」と刻まれていました。

上半身が裸で下半身にはびったりとしたくるぶしまでのパンツを身につけて「気どった」ポーズをとっている女性像、学生たちにはどう見たのでしょうか？ポーズをとっていることから、「モデルさん？」とか、「上だけ服脱いでるから今からお風呂に入ろうとしている人」と言う学生がいる一方、「気どった」というタイトルの割には嫌味な感じがしないという学生も。なぜ嫌味な感じがしないのか、もう一度作品を見て理

由を探っていくと、顔の向きと目に注目して、顎が上がっていないので、「(気どった)上から目線」になっていないためではないか、という意見が出ました。



「同じポーズをしてみてもいい？」と提案すると、ポーズをとるためにもう一度像をよく見ていた学生が「あ、左の足裏が見えている。かなり足首を曲げている。」と発言。数人の学生が同じポーズにチャレンジしてくれました。その学生からは、「結構腰にくる。」「右足に重心が…」「“見て”って感じかな？」などのつぶやきがありました。人物像の鑑賞では、こんなふうに鑑賞者も同じポーズをとって見ることで、作品に対して身体的にアプローチする楽しさがあります。

半身裸像の作品ですが、いやらしさを感じるかと尋ねると、首を振って「美しい！」と即答する学生。どこに美しさを感じたのか尋ねると、女性の人体としての美しさと、造形された人物の年齢を20代と見立て、そこに「若さ」を感じていることが分かりました。学生たちは若い女性の凛とした、瑞々しい美しさを素直

に作品から感じたようです。

因みに、後日当時の学報を調べたところ、像の台座の後ろに刻まれていたのは、短大創立20周年を記念した「学生会館」を建設した、大本組の社長夫妻(当時)であることが分かりました。

現在の学生たちにもなじみ深い 佐藤忠良の作品

なぜ、現代日本彫刻を代表する佐藤忠良の作品が平井キャンパスに設置されているのでしょうか？それは、当時幼児教育学科の教員で、絵画製作と専門演習を担当されていた中村節子先生が、学生時代に佐藤忠良に師事していたという経緯によるものです。1989年(平成元年)10月20日に、佐藤先生を迎えて除幕式が行われたことが、学報(1989年(平成元年)12月15日発行)に残っていました。



しかし、そのような由来のほかに、今の学生にとっても、実は佐藤忠良はなじみ深い作家なのです。それは、福音館書店「おおきなかぶ」の挿絵

を佐藤忠良が描いているからです。「気どったポーズ」の鑑賞後に、そのことを学生に伝えると、「え〜。そうなの！」と、みんなびっくりしました。そこで再び教室に戻って、図書館から借りてきた大型絵本「おおきなかぶ」を開いて、みんなで見ると「あ〜、この人なのか〜。知らなかった。」と、驚きの声。

今度は絵本の鑑賞を体験的にしてみました。

一番印象深いページである「ねずみがねこをひっぱって、ねこがいぬをひっぱって、いぬがまごをひっぱって、まごがおばあさんをひっぱって、おばあさんがおじいさんをひっぱって、おじいさんがかぶをひっぱって— うんとこしょ どっこいしょ」の場面再現に挑戦です。

2クラス合同授業のため、1クラスが「かぶチーム」と、「お爺さんチーム」に分かれ、もう1クラスがそれを見るようにして絵本のページを再現してみました。

再現した学生に聞いてみると、「かぶ」を実際に引っ張っているのはお爺さんだけで、後ろの人は前の人の服か、体を引っ張っているだけだから、「かぶ」はびくともしないという感想でした。「本当にかぶを抜くな



らどうする？」と投げかけたところ、「お爺さんチーム」は「かぶチーム」の周りを取り囲み、あっという間に「かぶ」は「引っこ抜かれて」しまいました。(写真下)



本当の事をその通りに描いて見せても、かぶの巨大さとそれを抜く大変さは伝わらない、だから佐藤忠良はあんなふうにあの場面を描いたのですね。

意外にも身近だった佐藤忠良を味わい、また、表現することの奥深さを感じた1日になりました。

佐藤忠良以外にも、平井キャンパスには様々な作品が設置されています。皆さん、学園内の豊かな芸術環境に目を向けてみてはいかがでしょうか？